平家物語（祇園精舎）　＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

祇園精舎(ア)の鐘の声、諸行無常(A)の響きあり。娑羅双樹(イ)の花の色、盛者必衰の①ことわりをあらはす。②おごれる人も③久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。④猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらはみな旧主先皇の政(ウ)にも(a)（従ふ）ず、楽しみを極め、いさめをも思ひいれず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを(C)知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。(D)近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごれる心も猛きことも、皆とりどりにこそあり(b)（き）ども、間近くは、(エ)六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へ承るこそ、輩心も言葉も及ばれ(c)（ぬ）。

問一　二重傍線部**ア**～**エ**の漢字の読みを現代仮名遣いを用いて平仮名で書きなさい。

問二　傍線部①～④の語句の意味を書きなさい。

問三　a～cの（　）内の語を適切な形に活用させなさい。

問四　波線部Aを比喩的に表現した五字以内の語句を、本文中から二箇所抜き出して答えなさい。

問五　波線部Bはどのような人々か、その説明として当てはまるものを次の**ア**～**オ**の中から選び、記号で答えなさい。

ア　栄華が長く続くことはないと悟って自ら王の地位を捨て、国を滅ぼした人々。
イ　権力が永遠に続くと信じて努力を怠り、国の乱れを治めきれなかった人々。
ウ　栄華を誇り贅沢三昧(ぜいたくざんまい)をしたために財政を破綻させ、国を衰退させた人々。
エ　武力で天下を制圧し、恐怖政治を行ったために、民衆に滅ぼされた人々。
オ　大きな権力を得たが、それを濫用したために、間もなく滅びてしまった人々。

問六　波線部Cについて、

(1)　発音の便宜上変化した音があるが、このような音の変化を何と言うか答えなさい。

(2)　変化した部分をもとの形に直し、全体を書きなさい。

問七　波線部Dと対になる部分を本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

学年		組		番号		氏名		得点

問一	問二		問三	問四	問五	問六	問七
ア	①	③	a			(1)	
イ			b			(2)	
ウ	②	④	c				
エ							

平家物語（祇園精舎）　＊

〔出題の意図と留意点〕　「平家物語」冒頭の名文なので、正確に読むことを心がける。語り物の特色である音便形についても注意を促す。語句については、難しい概念を適切な表現で記述できるようにしたい。抽象的な表現と具体例を結び付けて理解できるよう指導したい。

☆解答例と配点

問一　**ア**　しょうじゃ　**イ**　しゃらそうじゅ　**ウ**　まつりごと　**エ**　ろくはら　〈2点×4〉

問二　①　道理　②　おごりたかぶる人　③　長くは続かない　④　勢いの盛んな者　〈3点×4〉

問三　a　従は　b　しか　c　ね　〈3点×3〉

問四　春の夜の夢・風の前の塵　〈4点×2〉

問五　**オ**　〈4点〉

問六　(1)　音便　(2)　知らざりしかば　〈3点×2〉

問七　遠く異朝をとぶらへば（10字）　〈3点〉

計50点

祇園精舎

年　組　番

得点　／30

問一　次の傍線部の漢字の読みを現代仮名遣いを用いて平仮名で書きなさい。

① 祇園精舎（　　）　② 娑羅双樹（　　）

③ 猛き者（　　）　④ 極め（　　）

⑤ 承る（　　）

問二　次の傍線部の動詞の活用の種類・文中の活用形を答えなさい。

① 天下の乱れんことを（　　活用・　　形）

② 民間の憂ふるところを（　　活用・　　形）

問三　次の傍線部の語句の意味を書きなさい。

① 盛者必衰のことわりをあらはす（　　）

② ひとへに風の前の塵に同じ（　　）

③ 遠く異朝をとぶらへば、（　　）

④ いさめをも思ひいれず、（　　）

問四　次の傍線部の助動詞の意味と活用形をそれぞれ答えなさい。

① つひには滅びぬ、（　　・　　形）

② 心も言葉も及ばれね。（　　・　　形）

問五　次の傍線部の音便形をもとの形に戻し、音便の種類を答えなさい。

憂ふるところを知らざつしかば、（もとの形　　・音便の種類　　）

祇園精舎

☆解答例と配点

問一　①　ぎおんしょうじゃ　②　しゃらそうじゅ　③　たけ　④　きわ
⑤　うけたまわ　〈1点×5〉

問二　①　ラ行下二段活用・未然形　②　ハ行下二段活用・連体形　〈2点×2〉

問三　①　道理　②　すべて。まるで　③　調べてみると
④　考えにいれず　〈3点×4〉

問四　①　完了・終止形　②　打消・已然形　〈3点×2〉

問五　知らざり・促音便〈3点〉

（計30点）

祇園精舎

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらはみな旧主先皇の政にも従はず、楽しみを極め、いさめをも思ひいれず、天下の乱れんことを悟らずして、民間の憂ふるところを知らざつしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。近く本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごれる心も猛きことも、みなとりどりにこそありしかども、間近くは六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申しし人のありさま、伝へ承るこそ、心も言葉も及ばれね。

平家物語

祇園精舎　―　現代語訳　―

祇園精舎（の無常堂）の鐘の音は、諸行無常の（真理を示す）響きがある。娑羅双樹の花の色は、盛者必衰の道理を表している。おごりたかぶっている人も（そのおごりが）長くは続かない、まるで（はかない）春の夜の夢のようだ。勢いの盛んな者も最後には滅んでしまう、ただただ風の前の塵と同じ（ように、はかないもの）なのだ。遠く外国（の例）を調べてみると、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらは皆もとの主君や前の皇帝の政治にも従わず、歓楽を尽くし、（臣下の）諫め（の言葉）をも考えにいれず、天下が乱れることになるのを悟らないで、世の人々が悲しみ嘆くことを知らなかったので、（その栄華が）長続きしないで、滅んでしまった者たちである。身近く本朝（の例）を調べてみると、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごりたかぶっている心も勢い盛んなことも、皆それぞれ（に甚だしいもの）であったけれども、近頃では六波羅の入道前太政大臣平朝臣清盛公と申し上げた人のありさまは、伝え聞くにつけても、想像も（言い表す）言葉も及ぶことができない（ほどのすさまじさな）のである。

平家物語

祇園精舎 ― 品詞分解 ―

祇園精舎（格助・体修）の鐘（格助・体修）の声、諸行無常（格助・体修）の響き（ラ変・終）あり。
娑羅双樹（格助・体修）の花（格助・体修）の色、盛者必衰（格助・体修）のことわり（格助・対象）を
あらはす（サ四・終）。おごれ（ラ四・已）る人も（係助・列挙）久しからず（形シク・未・打・終）、
ただ（副）春（格助・体修）の夜（格助・体修）の夢（格助・体修）のごとし（比・終）。猛き者（形ク・体）も（係助・列挙）
つひに（副）は（係助・区別）滅び（バ上二・用）ぬ（完・終）、ひとへに（副）風（格助・体修）の前（格助・体修）の
塵（格助・比基）に同じ（形シク・終）。遠く（形ク・用）異朝（格助・対象）を
とぶらへ（ハ四・已）ば（接助・順偶）、秦（格助・体修）の趙高、漢（格助・体修）の王莽、梁（格助・体修）の朱异、唐（格助・体修）の
禄山、これら（代）は（係助・区別）みな旧主先皇（格助・体修）の政（格助・体修）に
も（係助・同類）従は（ハ四・未）ず（打・用）、楽しみ（格助・対象）を極め（マ下二・用）、いさめ（格助・対象）を
も（係助・同類）思ひいれ（ラ下二・未）ず（打・用）、天下（格助・主格）の乱れ（ラ下二・未）ん（推・体）ことを
悟ら（ラ四・未）ず（打・用）して（接助・単接）、民間（格助・主格）の憂ふる（ハ下二・体）ところを
知ら（ラ四・未）ざつ（打・用（促音））しか（過・已）ば（接助・順理）、久しから（形シク・未）ず（打・用）して（接助・単接）、亡じ（サ変・用）
に（完・用）し（過・体）者ども（断・終）なり。近く（形ク・用）本朝（格助・対象）を
うかがふ（ハ四・体）に（接助・単接）、承平（格助・体修）の将門、天慶（格助・体修）の純友、康和（格助・体修）の義親、
平治（格助・体修）の信頼、これら（代）は（係助・区別）おごれ（ラ四・已）る心（係助・列挙）も
猛き（形ク・体）こと（係助・列挙）も、みな（副）とりどりに（形動ナリ・用）こそ（係助・強意（係））
しか（過・已（流れ））ども、（接助・逆確）間近く（形ク・用）は（係助・区別）六波羅の入道前太政大臣　平朝臣清盛公
と（格助・引用）申し（サ四・用（謙）語り手→清盛）し（過・体）人（格助・体修）のありさま、伝へ承る（ラ四・体（謙）語り手→清盛）
こそ（係助・強意（係））、心（係助・列挙）も言葉（係助・列挙）も及ば（バ四・未）れ（可・未）ね（打・已（結））。